

## Round Table: 外国人研究者生活支援を語る

**浜小路アンナ** はまこうじ・アンナ

社団法人科学技術国際交流センター (JISTEC®) つくば事務所

**西川景子** にしかわ・けいこ

社団法人科学技術国際交流センター (JISTEC®) つくば事務所

**小澤みどり** おざわ・みどり

カブリ数物連携宇宙研究機構国際交流係長



\*JISTEC(Japan International Science & Technology Exchange Center)は文部科学省科学技術・学術政策局の所管する社団法人で、研究者交流・支援事業等を通じ科学技術の振興を図り、国際社会への貢献を目指す。Kavli IPMUでは3年前からJISTECが週に3日サポートデスクを開設し、外国人研究者とその家族の生活支援業務に当たっている。

### IPMUのサポートデスクに慣れるまで

**小澤** 先ず、お二人の自己紹介をお願いします。

**浜小路** スウェーデン生まれで1975年に来日、88年からJISTECで働いています。最初はアルバイトで、ちょっとの間だけということでしたが、もう25年も経ちました。3年前からIPMUに来ています。

**西川** 私がJISTECに入ったのは13年前です。つくばのインフォメーションセンターという所で仕事をしていて、外国人に色々な情報を提供していましたが、そこでアンナさんと一回だけお会いして、そ

の後違う仕事をしていました。たった一回しか会っていないのに、アンナさんから二の宮ハウスという外国人研究者向けの宿舎ができるから、そのスタッフになってくれないかと言われました。

**浜小路** 「誰か良い人いないですか?」と聞かれた時にすぐ彼女のことを思い出しました。

**小澤** よく思い出しましたね!

**西川** 一回しか会ってないですよ。

**浜小路** 印象が強烈だったので。

**西川** (笑)

**浜小路** インフォメーションセンターに行ったら、もうそこで働いてなかったの

で、「どこで働いてるの?」と探しました。

**小澤** わざわざ職場を探し当てて行ったのですか?それはすごい。

**西川** 私も丁度違う仕事がしたいなと思っていた時だったので、「すぐ行きます!」って…

**浜小路** だから、私に頭上がらないの。

**西川** 足向けて寝られませんか。(笑)

**小澤** 結構長いお付き合いですね。JISTECさんにIPMUに来て頂いて、丁度丸3年になろうとしています。最初はお互いに初めての試みでしたから、不安というか慣れないところがありましたね。

**西川** はい、すごく不安でした。

**小澤** 例えば、最初にアンナさんから「お互い顔が分かっている方が絶対に良いですよ」と言われました。そういうことを重視しておられるんだと、すごく印象的でした。それから「24時間緊急用の携帯電話を持って、電話がかかってきたらどんな時も必ず電話を受けないといけないのですか?」と聞かれました。きっと、毎日生活している中で、万一電話を取れないこともあるかもしれないと考えての質問で、仕事に対する真剣味を感じました。それが伝わってきて、素晴らしいなと思ったのですが、最初はやり難かったですか?

**浜小路** 緊急の電話の向こうには困っている人がいる訳だから、「私が電話出られたら、うまくいったのに」とか、自分のちょっとした不注意で繋がらなくて、その結果大変なことになったとか、そう思うと絶対電話に出なくては行けないと思っています…

**小澤** だから簡単に「はい、できますよ」というものではないということですね。お二人のように外国人研究者の生活サポートのノウハウが蓄積されていて、すごく慣れている方でもそれだけ不安に思うのですから、大変なお仕事ですね。

**浜小路** 緊急の場合には何があるか分からないですからね。それまでは自分が知っているつくば地区だけだったので、それなりに自信はあったけれど、東京とか柏近辺はそんなに詳しくないので、緊張感が違います。

**小澤** でも、この近辺に大分慣れましたか?

**西川** まだまだです。

**浜小路** 少しずつですね。つくばは20年以上ですが、IPMUはまだ3年ですから。いざとなったら東京にはアクサ・アシスタンス・ジャパン\*1があるから、大丈夫かなと思いました。

**小澤** 心配されたように、電波の状態が悪くて通じないとか、色々不可抗力がありますよね。最初の電話に出られない時のバックアップとして、アクサ・アシスタンス・ジャパンという100%必ず電話に出てくれるサービスが重要だと思っています。

**西川** 私達も普段の生活をしているので、電話を持っていても電波が届かない地下鉄に乗るとかということがあります。

**浜小路** 今は緊急カード\*2を渡す時に、私達も車運転したりするから、「万一電話に出なかったら、また何分か後にもう一回電話してね」と説明しています。

**西川** それはカードを渡す時に伝えていきますね。

**小澤** 1年にどれくらいかかってきますか?

**浜小路** 本当の緊急はそんなにないですが、そうは言ってもいつかってくるか分かりません。

**小澤** いざというときのための電話なのでとても大事です。以前、朝早くかかってきたことがありましたね、赤ちゃんが熱を出したという電話が。

**西川** 朝5時くらいでした。

**浜小路** あと、転んで怪我したとか、突発的なこともあります。IPMUの研究者にはお子さんは少ないですが、子供がいるとしょっちゅうありますね。不思議に週末の夜に熱が出たりします。でも幸いこれまでそんなに大きな緊急事態は…

**小澤** 今まで、そんなに大変なことは起きていないけれど、ちょっとした事故とかは色々ありました。

**浜小路** これまで、なんとか対応できていた感じですね。

#### 役に立っていると実感できて楽しくなった

**小澤** 週3日、IPMUに来て、窓口に来て頂くというのも初めてだったと思いますが?

**西川** 研究者が窓口気軽に立ち寄ってお話してくれたりすると、信頼関係を作るところまではいかないにしても、お互いを知るチャンスがあるというのがすごく良いですね。

**小澤** 知り合うチャンスということでは、来日してすぐに役所や銀行と一緒に来て頂いたりして顔を覚えてもらっています。1年位経ってから外国人研究者にアンケートをしましたが、その時の回答は好意的な内容ばかりでした。例えばお二人の仕事振りが誠実で、すごく信頼しているとか、色々なことを頼めてすごく助か

っているという風におっしゃる方が非常に多かったので、うまく軌道に乗って良かったなと思いました。最初、私達も緊急用の携帯電話を当番で持った時期がありましたが、日中事務の仕事をして夜もずっと携帯を持つというのには限界がありました。JISTECさんが生活支援専門で来てくださったので、私達も非常に助かっています。

**西川** そう言って頂いて嬉しいです。それから、IPMUの事務スタッフの皆さんがすごく良い方だったので助かっています。

**小澤** 事務職員とこんなに密に連携するのは、つくば地区でのサポートと大分違うと思いますが…

**西川** はい、違います。最初はIPMUのスタッフの皆さんで殆どサポートできていらっしゃるの、私達は何もやる事が無いのではないかとあって、逆にそれがすごくプレッシャーでした。

**浜小路** 最初はちょっと怖かったですね。

**小澤** そうですか!?

**浜小路** 自分達がどうやってレベルアップしたら良いのかという感じで、とても緊張しました。

**小澤** それまで私達もある程度は生活支援業務をしていましたから、最初仕事の棲み分けというか、どこまで私達でどこからJISTECさんをお願いするかというのに慣れていませんでした。段々仕事の区分けができてきて病院のことやプライベートなことは全てJISTECさんをお願いするというので、今はかなり明確に線引きができています。

**西川** だんだんと時間が経って、「最近なんかちょっと楽しくなってきたね」とアンナさんと話したのを覚えています。

**浜小路** そう、最初は自分がこの地域の情報も持っていないので自信がないというのか、「何か聞かれても答えられないというのじゃ、何のために私はいるの?」という感じがしました。つくばでは、もう

\*1 アクサ・アシスタンス・ジャパンは24時間確実にオペレータが電話に回答する英語情報提供のサービスを行う会社

\*2 緊急カードは、新規に来日する採用者や長期ビジターなど、緊急対応の対象となる外国人研究者に渡す定期券大のカードで、JISTEC、アクサ・アシスタンス・ジャパン、IPMUの連絡先が記載されている。

慣れているので私達は大体のことは自分で判断して動きます。柏では自分がどこまで何をやれば良いのか分からなかったし、動くときはIPMUに断ってからとか、新しいことがあってちょっと戸惑いました。それに、私達が来る前からIPMUにいた外国人の人達は、もう日本の生活に慣れているのでなかなか相談に来なかったのですよ。だから、最初は「私達は必要ないの？」みたいな感じでした。新しい人が来て、どんどん私たちに頼むようになって、「役に立っているな」って実感がありました。それで、だんだん楽しくなったのね。

**小澤** 今ではいろんな相談事で結構、びっくりなしに人が来ていますね。

**浜小路** そう、座っていて誰も来ないよりは人がたくさん来て忙しい方が良いでしょう。

**西川** あと皆さんが階段下りてきたりする時に、手を振ってくれるんですよ。

**小澤** 仲間みたいな感じでしょうか。ただお喋りしに来たりする人もいないのですか？

**浜小路** そう。「なんかちょっと聞いてもらいたい」という時があるのでしょうか。「別に何も相談は無いけど、元気？」って言ってくれる人もいますし…

**西川** どこか行って帰ってくると、「帰ってきたよ」って言ってくれるだけでも嬉しいですね。

**浜小路** そう、良い人が多いですね。

**西川** 本当に良い方ばかりで良かったです。

**小澤** 日本は生活し易いのでしょうか。日本語ができない人も多いし「不便かな」と思う反面、治安も良いし、JISTECさんもおられるし…

**西川** 皆さんIPMUの待遇にとっても満足していると言っていますね。それから、海外にこんなに行かせてくれる所はなかなか無いと。

**小澤** 「年に1ヶ月から3ヶ月まで、海外に行って自分自身とIPMUのことを宣伝してきなさい」という方針があります。

**浜小路** それから、みんな不思議な人達ですね。

**西川** 不思議な人達？

**浜小路** 楽器をやったり…

**西川** 多才ですね。

**小澤** 研究だけじゃないとか…

**浜小路** いろんな趣味があったり、いろんなことに詳しい。

**西川** お話していても楽しいですね。

**小澤** そうですね、もともとは音楽家だった人もいます。

**西川** スポーツなんかもされてますね。

**浜小路** 色々なルールに縛られなくても自己管理できる人達が多いかなという気がします。

**小澤** あまり管理されるのに慣れていない人達が多いから、ある程度、自主性に任せておかないといけないのです。日本式に「こうしなさい、あしなさい」「あれはダメ、これはダメ」と言うのは控えています。

**西川** そうですね、それが国内の他の研究機関と違うところかもしれないですね。

**小澤** 日本だと管理するのが当たり前みたいなのがありますからね。

**浜小路** 管理し過ぎると、スタッフとの距離もあるようだし、自分の研究が楽しいって思えなくなるみたいですね。

**小澤** IPMUでは研究者と事務スタッフの仲は良いですよ。皆さん大体ハッピーそうに見えます。なかなか本音



がこちらに伝わってこないこともありますけれど、IPMUオーケストラ<sup>\*3</sup>のメンバーから話を聞くと、IPMUはすごく楽しいって言っている人が多いということです。それをそのまま信じているのですが、でも、たくさん研究者がいますから、中にはちょっと変わった人もいてJISTECさんを困らせているのではないかと心配です。

**浜小路** 研究者は大体みんな変わってますよね。変わってないと研究者になれないような気がします。「そこ気にしてるんですか?」「こんな事で悩んでるんですね〜」ってびっくりすることがあります。

**小澤** 「え?こんなに優秀な人でもこんなこと気にしてるんだ〜」みたいな感じですね。

## 親や友達の代わりになって外国人をサポート

**西川** この仕事を始めた時に、私達の仕事は相手に選択肢を与えることだってアンナさんからアドバイスを受けました。こういう選択肢もあるということを相談してくる方に提示して、選ぶのは本人の自由。決めた後はその方の選択を尊重する。私達は「本当はこっちの方が良いのでは?」と思っても、本人が決めたことだからあまり口出ししないのが大事と言われて「なるほど」と思いました。

**小澤** 村山機構長もまさに同じようなことをおっしゃっていました。「こういう可能性とこういう可能性とかあるけれど、あなたはどれがいいですか」と選んでもらうのが良いみたいですね。

**西川** 本当は「え?なんでそっちを選ぶの?」と思うこともあるけれど、選んだのは本人だからそれを尊重しないと…

**小澤** そうですね、住まい探しにしても、わざわざ面倒な方を選ぶ人もいますね。でも仕方ありません。その時それが良いと思って選んだのは本人なので。

**浜小路** その後でうまく行かなくて相談に来ると、「だから言ったでしょ?」と言いたくはなるけれど…

**西川** 言わない。

**浜小路** サポートですからね。普通、自分の国では親であったり兄弟、友達であったり自分の周りにサポートがあります。日本に来たら親や友達は無いから、私達はあくまでその代わりのサポートです。

**西川** これもアンナさんがいつも言っていることですが、病院に行っても、私達は医療通訳ではなくて、あくまでサポートです。医師が言ったことをそのまま伝えるのではなくて、患者さんの立場、研究者の立場に立ってものを言うところが通常の医療通訳とは違います。

**浜小路** 実際、医療通訳となると、話す内容全てと医療専門用語も理解して伝えないといけないから無理ですね。一緒に話を聞いて分かっているかどうかを確かめながら「先生、4歳くらいの子どもでも分かるように説明して下さい」ってお願い

<sup>\*3</sup> Kavli IPMU News No. 20 (December 2012) の39-41ページ参照。

います。

**小澤** でも、そういう通訳のやり方で皆さん満足していると思います。親兄弟や友達が付き添っているような感じですよ。

**浜小路** そうですね、今までのところは。病院に行く前にその人の病名とか症状を聞いて、インターネットで



調べて、それなりに準備して、いくつかの言葉のポイントを押さえて一緒に行きます。分からない時は先生に素直に「もう一回説明してください」って頼みます。今まではこういう風にしてきました。

**西川** それは、例えば不動産屋さんに行く時も同じです。英語を話す不動産屋さんだとしても、不動産屋の立場でしかものを言いませんから。私達サポートする人間は、住む人の立場に立つて言うところが違うと思います。

**浜小路** サポートする者としては、その人の味方になるような感じで、市役所や銀行に行つてその人のために窓口の人とケンカしたり、揉めたりもしますね。

**小澤** 私達もよくケンカしています。

**浜小路** ただ、その人の側に立つてサポートすることは大事ですけど、たまには「これはできないんだよ、無理なのは無理なんだよ」って厳しいことを言う必要があることもあります。

**小澤** 本当のことを教えてあげるのも大事ですね。あと、お金に関することはきちんと説明するようにしています。別にお金に困っている訳ではないのですが、外国人はお金のことをはっきりさせる傾向はありますね。ところで、随分頑張って日本語を勉強している外国人研究者もいますが、多かれ少なかれ日本での生活は言葉の面で不便でしょうね。

**西川** よく欧米の人が「自分の国ではこんな手厚いサポートは無いよ」とすごく喜んでくれます。でも、例えば英語圏に行ったら何でも読めるわけですよ。英語圏以外のアジアの国に行ったら書いてあることがまるで読めなくて、生活様式も違う。自分で選んで行ったとしてもやは

りすごく困ると思います。そういう状況ではやはりサポートは必要だと思います。

**小澤** 昔より英語表記は色々な所で多くなってきていますが…

**浜小路** 良くそういわれます。色々な所に英語のマニュアルがあったり、説明が書いてあったりします。でも、皆それぞれ知りたい情報とか置かれている状況が微妙に違うのに、本に書いてあることとかインターネットに載っていることは一般的な内容ばかりなのです。分かって欲しいのですが、やはり人と人の繋がりが必要です。

**小澤** 私達もこれから来る人に対して、ホームページに色々と情報を載せて「それを見てね」と言うこともありますが、それだけだと全く足りないですね。一人一人状況が違うし、聞きたいこともそれぞれ違うから、個別に連絡を密に取つて、できるだけ詳しく説明するようにしています。

**浜小路** 翻訳ソフトとか、なんとかカポットとかは、「イタリアンレストランはどこですか?」っていうのはできるかもしれないけど、そうでないものはどうするんですか?それは人ですよ。

**西川** そうですね。

**浜小路** だからサポートセンターが必要なのです。なんでもっとサポートデスクやサポートセンターを作らないのだろう。雇用を増やすことにもなるし、人と人の繋がりがあって、そこに行けばいろんなことを聞けるし、助けてもらえる。悪いことは何もないのに、どこにもないんですよ。

#### 肝心の所が抜けている日本の国際化

**小澤** そうですね、これだけ国際化とかグローバル化といって外国の人をどんどん呼ばなければいけないって言われているのに、サポートデスクもサポートセンターもほとんど無い。

**浜小路** 入管だって英語話せる人いないの。

**小澤** えー、それはビックリですね。

**西川** 入管から来る葉書一つにしても全部日本語で書いてあるのにはビックリ。

**浜小路** 銀行だって病院だってそう。英語ができるスタッフはすごく少ないですよ。なんでだか分からないけれど一番好奇心が抜けてるんですよ。

**小澤** 英語のマニュアルとかパンフレットばかり作っているのではないですか?翻訳して。

**浜小路** カラーで立派なの。郵便局は何時から何時まで開いていますって書いてあるけれど、行ってみたら、英語が通じない。

**全員** (笑)

**浜小路** なんでいつも人に目を向けないんだろう。紙ではなくて、人を配置したら色々なことに対応できるのに。

**小澤** ええ、そう思います。

**西川** あと、英語でよく書いてあるのは、「〇〇しちゃいけない」っていうことばかりなんですよ。



**浜小路** そうそう。

**西川** 英語で「両替できません」とか、「監視カメラあります」とか。でも「お得なポイント情報」とかいうのはね、何もありません。

**浜小路** ないない。

**小澤** 禁止や注意事項ばかり、英語で書いてありますね。

**西川** やはり外国人の立場では考えられてないですね。

**浜小路** それに、日本に来る外国の人達をどこまで面倒みれば良いのかということがありますね。「そんなことまでしなくて良いのではないですか?」とか「過剰なサービスではないですか?」とか言われます。何でも頼んでくる人は稀で、普通は本当に必要な時だけ頼みに来ます。広く拾うようにサポートしないと、サービス受けられない人がたくさん出てくるから、範囲を少し広めにする方が良いと思います。

**小澤** 留学生だと日本語ができて当たり前だと思っている人が結構いますね。IPMUの研究者は留学生ではないのに、「留学生の方だから、日本語ができるでしょ?」という風によく間違われます。そういう感覚があるので難しいですね。外国人研

研究者を一人招へいするにしても、手続きや生活面でそれなりに手間がかかりますから、サポートがあると良いですよ。でも現状では、殆どは招へいする側の先生の負担になってしまいます。先生ご自身か、秘書さんとか助教の先生とかが面倒をみる。そういう余裕がなければ、招へいできないということになってしまいます。

**西川** 先生がとても面倒見が良い先生か、そうでないか、すごくばらつきがあります。

**小澤** 放っておかれる人もいますね。

**浜小路** だから、もうこんな地獄みたいところは二度と来ないと言って帰った人もいました。

**小澤** それは悲劇ですね。困っているのに助けてくれないのは。

**西川** あと、同じ研究室の人には頼めることと頼めないことがあるでしょうし…

**浜小路** 研究室の中で人間関係ってありますよね。でもサポートセンターがあるとちょっと離れているから頼み易いかもしれない。秘書さんや研究室の人だと、忙しくて断ったら次からその人とやり難くなりますよね。でもサポートセンターは「ごめんなさい。約束入っているから、今日は行けないのよ」と断ることができる。

**小澤** 距離を置くことができますね。

**浜小路** そう。同じ研究室で毎日顔を合わせる人同士だと、何でもかんでも頼んでくる人には秘書さんも大変だし、忙しい秘書さんだったら、相談に来た人も放っておかれて大変だし、そのバランスが難しい。

**西川** 第三者的な私達の方が頼みやすいと思ってくれる。

**小澤** 私達もその点はとてもありがたいと思っています。研究者もプライベートなことを事務スタッフに相談したくないだろうし、特に病気のこととかはJISTECさんにお願ひできるので皆さんも気兼ねしないで済むと思いますよ。

**浜小路** そう思ってくれて嬉しいですね。

**小澤** 第二、第三のアンナさん、西川さんが生まれるといいな、って思っています。

**浜小路** 育っていかなくてはいけいない

ですけどね。

**小澤** 国際化の上では絶対必要になると思います。

**浜小路** ただ、ソフト面にお金がなかなか回ってこないのです。

#### 電話対応やマニュアルだけでは済まない

**小澤** 先ずハード面で、ソフト面は後回しって感じですね。それに短期的な予算は出易いのですが、長期的なものはなかなか難しいですね。短期的な予算だとどうしてもマニュアルやパンフレットを英語で作りなさいとかになってしまいます。

**西川** 多分、机の上で考えてる方はそれで済むと思うのでしょうか。あるいは「電話対応だけでいいでしょ」って。

**小澤** 電話だけで済むほど簡単ではないですよ。

**西川** そうなんです。そこがなかなか分かって頂けないです。

**浜小路** 緊急電話を持ったことない人は、会ったことの無い人からかかってきても対応できると思っているみたい。

**西川** 「英語できるんだから全部分かるでしょ？電話でできるでしょ？」って言われます。

**浜小路** 「大してかかってこないだろうから、大丈夫でしょ？」とも。

**西川** でも、24時間ですよ。

**小澤** いつでも出られるようにという心構えていないといけない。

**浜小路** もしも電話の向こうの人が誰か分からないとしたら、「あなたは誰？」ということから聞かないといけません。

**小澤** 相手の英語も母国語じゃないと、慌てているから「わーっ」でなっている。

**浜小路** 聞き取るのも大変なんですよ。

**小澤** 誰かが倒れたとかだとパニックですよ。

**浜小路** 例えば警察に電話して「こういう人から電話がありました」って言うと、先ず「あなたは誰？どこに住んでるの？」とか、「その人とどういう関係ですか？」って色々聞かれるでしょ。「あ、それはちょっと分からないですけど、それもちょっと分からないですけど」ってなったら、警察

は相手にしてくれないわね。だから、誰々さんはどこに住んでいて、どういう人だと予め大体分かっていると良いですよ。リストとかがあればね。IPMUは全部リストがあって、それを見れば必要な情報がすぐ分かる。

**西川** あのリストは、一目瞭然ですごく助かります。

**小澤** 誰がどこに住んでいて、どういう保険に入っているとかか全部、もちろんマニュアル秘ですけど。

**西川** 水道とか電気とかの連絡先まで入っているの、水漏れとか何か問題があった時にすぐ管理会社に連絡できるので、本当に助かっています。

**小澤** 顔が分からないと相手は何言っているかよく分からないこともありますが、知っていれば分かりますね。

**西川** 電話に出る時に、「あ、この人か」という風に出られるか出られないかでは、全然違いますね。

**小澤** 相手をよく分かっているとね。

**西川** でも、それってマニュアルにはないことなんですよ。

**小澤、浜小路** ないない。

**小澤** 私達事務の方でも、研究者の受入手続とか、研究活動支援とか色々なサポートをしています、それらもなかなかマニュアルにはできない仕事です。マニュアル化できるのだったら、どんなに楽だろうと思います。スタッフもこんなにたくさんいらないうちも知れませんが、ちょっとしたさじ加減というか、伝え方を工夫したりとか、その場その場で臨機応変に対応していく必要があります。ですから、なんでもマニュアルにしないとされると反発を感じます。

**浜小路** 例えば誰かを病院に連れて行くときに、その人の状況によって行く病院を選ぶようにしていますが、なぜか海外から来る人は大体自分の国のやり方が一番良いと思っていますね。あまり医療制度が整っていないような国から来ても、それが基準で、それと違うのは良くないシステムだというのが頭にあります。でも「日本ではこういうやり方ですのですよ」「確かにそういうのもあるけど、こういうメリットもあるから」と説明しま

す。「スムーズに行くように、こうしましょう」と説明すると、「あー、なるほど」とわかってくれる。例えば、子どもの具合が悪くて採血するとき「親御さんは外で待っていて下さい」って先生が言うでしょ。そういうときに爆発する親がいます。そういう時は、先生に「すみません、子どもを自分の目の届かないところに置いておくのはあり得ないことなんです。だから、申し訳ないんですけど…」と説明するんです。すると先生も外国の人のことを分かってくれる。そういうことも私達の大事な役目だって思っています。

**小澤** アンナさんはたくさん経験を積まれているから、そこまでサポートできると思っています。私だったら、そんなこと知らないから「先生が出て行ってと言ってるよ」って、そのまま言ってしまうと思います。

**西川** 私もそう言っちゃう。

**浜小路** 何回か行った後で、いちごを持って行って先生に謝ったこともありました。

**西川** ポケットマネーでね。

**浜小路** 次に行ったときにその先生にまた診てもらいたいですからね。

**西川** まだ柏では医師との関係というのもできていません。

**浜小路** そう、そこがちょっとね。

**西川** もう少し経験を積ませて頂ければ…

**小澤** これからなんですね。

**浜小路** それはやっぱり経験ですよ。

**小澤** 日本の医師と外国の医師では随分違うと思います。

**浜小路** 病院によっても全然違いますね。

**小澤** アメリカだと一種のサービス業的で、患者さんはお客様なんですよ。

**西川** ええ、日本みたいに2時間待って3分で診察終わりということは多分無いでしょうね。

**小澤** 「軽くあしらわれた」みたいにショックを受ける人がいるでしょうね。

**浜小路** 医師が取り合ってくれないのは、ちょっとビックリする時もあります。だから、なるべく日本の状況を説明するようにしています。でも「日本の病院、すごく良かった」って言う人もいますね。

## 来日して38年、アンナさんの苦労話

**西川** アンナさんは責任感がすごく強い。

**浜小路** 多分ね、私みたいな外国人は100%は当たり前、日本人の150%やらないと認めてもらえないからですよ。外国人がちょっとでも失敗すると「あ、外国人は」と言われる。「外国人は真面目じゃない」「外国人は怠け者」「外国人はいい加減」ってすぐ言われるから、150%働かないとダメなの。

**西川** それはアンナさんが長く日本に住んでいて、しかも早い時期にやってきた外国人だからだと思う。今だったら、日本に来たばかりの外国人が少しでも日本語できたら「すごい。日本語できるね」「お箸使えるのね」って思うけど。

**浜小路** それはお客様だから。日本人はすぐ褒めるけど、すぐ引きずり下ろすんですよ。長く居るとちょっと失敗しただけで、すぐバッシング。

**小澤** 確かにそういう傾向ありますね。今までおだてていたのに、急にパーンと落とすっていうの。

**西川** そう言われてみないと、普段は意識してないです。

**小澤** だからアンナさんはいつも緊張して、先の先を考えて行動しておられる。

**浜小路** ずっとそうしてきましたからね。

**小澤** それは、ストレスですよ。

**浜小路** ストレスですね。でもだんだん年取ってくると、人間ってそれなりに、あの…

**小澤** 鍛えられる？

**浜小路** おばちゃんになっちゃうから。

**全員** (笑)

**浜小路** 昔ほどはあまり敏感ではないのね。

**小澤** じゃあ、日本に来てすぐの頃は大変だった？

**浜小路** そう。大変でした。皆よりできないとダメ、という感じでしたから。

**小澤** できて当たり前みたいな…

**浜小路** はい。少しでも何かあったら「あー外人」って。うまくいなくて泣くと「あー外人はすぐヒステリーね。」とかね。いろいろなことを経験しましたから、先に先に、言われないように、言われな

いように、みたいな感じになっていました。

**西川** がんばったよねー。

**浜小路** そうねー。頑張ったよね。

**小澤** 来日して何年ですか？

**浜小路** えーと、38年かな？ 1975年からですから。

**小澤** 日本は変わりましたか？

**浜小路** もう、別の国みたい。変わりましたが良くくなったかと言えば、そうでもないと思います。昔の良いところが失われたり。

**小澤** お住まいは？

**浜小路** 土浦です。ずーっと同じ住所で同じ電話番号。

**全員** (笑)

**浜小路** いろいろと経験してきたから、海外から来ている人には日本の良さを分かってもらって、それで帰ってもらいたい。日本の人には、外国の人とうまくやってもらいたい。そうでないと私とか私の子どもが生活する場所が無いの。だから必死なんです。日本の人には「外国の人の中には変な人もいるけど、実はこういう訳でこの人の国ではこんな風にやっているから、ただ変なだけじゃないのよ。こういう過程があってこういう理由でこの人はこういう風に考えるんだよ。」と説明して少し分かってもらう。逆に外国の人には、日本のやり方を少しでも分かってもらうようにする。例えば病院で「なんでこんなに待たないといけないの？」って聞かれたら、「日本では全員が健康保険の制度に入っていて、皆が医療費の一部を負担すれば全員診てもらえる。でも一人一人長くかかったら、全員を診るのに、今の金額ではできなくて値段が3、4倍にもなるでしょ？ 皆がある程度安い金額で見てもらえる方が、たとえ時間がかかっても、高いよりは良いと思っているから、こうなってるんだよ」という風に説明するの。

**西川** 勉強になる～。そういう説明をしたことは無かった。

**浜小路** 単純な説明だけど、大体そういうことなんじゃないですか？

**小澤** でも、すごく説得力がありますね。

**西川** わかるわかる。それは納得するわ。

**小澤** そういう説明がなかなかできないんですよ。

**日本人でないからこそ本音で言えることがある**

**西川** やはり、経験積んでいるだけあるわね。でもね、アンナさんは日本人じゃないということで、いろいろ言える、本気で本音で言えるということがあります。

**浜小路** やはり、日本人だと日本の悪口は言いにくいじゃない。

**西川** だから、すごく貴重な存在です、アンナさんは。

**浜小路** そうね、もう少し日本にいる外国の人もこういう仕事してくれるといいのだけど。

**西川** している人もいるけど、なかなかアンナさんのようには…

**浜小路** 日本語も分からなければいけない、読めることも必要となると、なかなか。

**小澤** アンナさんみたいに漢字も含めて日本語を読めるというのはすごいことですよ。

**浜小路** 漢字は結構中途半端です。

**西川** でも私にはアンナさんは外国人という気がしないですね。

**浜小路** 自分でも時々分からなくなっちゃう。

**西川** 見た目も、日本人と同じような感じがしてきちゃうの。

**小澤** もう中身は半分以上日本人化していますか？

**浜小路** そうね、大人になってからずっと日本だから。でも、育ちが違うから少しは日本的でないところはあります。時々外国の人に怒られるんです。「あんた、日本に長過ぎるから日本の悪いところ見えてないんだよ」とか、慣れ過ぎとか、諦めてるとか、言われてしまう。

**西川** さすがにそういう本音を私に言うてくる人はいないですね。外国人の愚痴を聞けるという立場もすごく貴重だと思います。多分おかしいと思っても日本人の私達には言えないことがたくさんあると思う。

**浜小路** 私達二人、いいコンビだと思いますね。

**西川** でこぼこがハッキリしているかもしれない。

**小澤** お互いに補い合いながら。

**浜小路** お互いの良いところも悪いところも結構知ってますから、あまり隠すところがない。

**小澤** 率直にものが言える？

**西川** はい。

**浜小路** 言えると思います。だから意見が合わない時も、間違ってるって言える。

**小澤** 相手のやり方は違うと思うこともあるんですか？

**西川** それは、あります。

**浜小路** 私はいつも先ず「えーっ？」で。西川さんは、もう先に進んでいるけれど、私は「えー？」って感じなんです。

**小澤** 行動派なんですね、西川さんは。

**浜小路** 前向きですよ。前から感心しているのですが、例えば色々言われても、「え？それやるんですか？」とはならない。「はい、分かりました。はい、大丈夫ですよ。」って、いつもそうなんですよ。

**小澤** それは、素晴らしいと思います。

**浜小路** イヤな顔全然しないで、どうするかは後で考える。取りあえず、「はい」って感じ。

**小澤** 本当にイヤな顔一つしない。朝もすごく素敵な笑顔で部屋に入って来られるので、癒されます。研究者も自分が受け入れられているということを感じるんですよ。

**浜小路** 私もそこは、いつも「見習おう」って思っています。それなのに「え？」ってなっちゃう。

**全員** (笑)

**小澤** 「えーっ？」って言いながらも、ちゃんとやったださってますね。

**浜小路** そうそう。心の中では、「まあ、やってみるか」みたいな感じ。西川さんは前向き。私はちょっとどっちかっていうと…

**小澤** 慎重な方ですか？

**西川** そう。すごく慎重なんです。

**浜小路** 英語で言うと、I'm an optimistic pessimist.

**西川** 前向きな悲観主義者

**浜小路** 悲観的な方なんだけど、前向き。前向きだけど、悲観的。だから、いつも何か悪いことも考えてるの。余計なことまで考えてしまう。

**西川** すごく慎重なんですね。

**浜小路** 考えなくていいようなこと考えて、夜中に眠れなくなるまで心配してるの。

**小澤** それは、すごい！

**浜小路** で、西川さんは前向き、「きつとうまくいくんだろう」みたいに楽観的。

**西川** 別の言葉でいうと、アンナさんはすごく真面目で私はいい加減。

**浜小路** そんなことないよ。そう意味じゃなくて。

**西川** 例えば私は24時間の緊急対応の携帯を持っていても、映画に行っちゃうの。映画に行くときは通路側の席に座って、マナーモードにして手に持ってる。でも、アンナさんは携帯を持っている時は映画に行かないの。極力お家にしようとする。私は普段どおりの生活しちゃう。だから、「アンナさんはすごく真面目で、私はいい加減だなー」って思う。

**小澤** でもやり方が違うだけなんです。サポートしたい気持ちはお二人とも同じなので。

**西川** IPMUの良いところは、研究者に色々お願いされても「じゃあ、調べるね。やってあげるね」って気軽に言える。基本的には何でもサポートして良いので、そこが助かります。

**小澤** せっかくのサポートデスクなのに「これはダメなのかな？」という風に遠慮してしまうようにはしたくないのです。もちろん忙しい時は、例えば「お相撲を見に行きたいんだけど…」なんていうのは、後回しにして頂いて良いのです。そこら辺は皆さんわきまえているはずですから。

**浜小路** あと、IPMUのスタッフに相談できるのが良いですね。

**西川** 何かあった時、二人で「小澤さんに聞いてみよう」って言えるので、すごく助かっています。

**浜小路** お世辞じゃないですよ。

**小澤** ありがとうございます。でも、契約がありますから、IPMUがJISTECさんに委託する業務内容をして頂くという大前提があるので、そこから逸脱しないようにと常に意識して、お仕事を依頼するようにしています。

## 100人くらいの出産に立ち会ったアンナさん

**小澤** 今では私達の連携も軌道に乗っているんで、大体こういうときはこういうのが決まっています。IPMUとしてサポート状況を把握している、という程度で、私が判断しなければいけない場面は少なく、信頼してお任せしています。お陰様でこのサポート体制は非常にうまくいっています。病気だけでなく、出産のサポートもしてくださってますね。

**浜小路** そう。3月がすごいですね。IPMUで1組の夫婦、全部で4組もかかえています。

**小澤** 出産ラッシュですね。

**西川** 毎週妊婦検診も行くんですよ。

**浜小路** 無事に生まれるまではドキドキしますよ。いつもうまくいくとは限らないから。

**西川** アンナさんはボランティアとしてカウンセリングもやっていたことがあって、辛い結果に何回も遭ってるから。

**浜小路** 不幸な事がおきたら、言葉を掛けるというよりも寄り添うみたいな感じね。その人の辛さを一緒に共有しているだけ。何もできないけれど。そういう時はいろいろな手続きをしないとならないから、それは私が引き受けるみたいな感じですね。だから、お産はすごく楽しいことだけれど、どうぞ無事に生まれてください、と祈るような気持ちです。

**西川** いくら順調にっていたとしても、突然変わってしまうこともあるし…

**浜小路** わからない。本当に分からないから、ドキドキしてる。

**小澤** 赤ちゃんの名前にアンナってつける人達がいっぱいいるんですよ？

**浜小路** 何人かいますよ。

**西川** すごい話ね、それって。

**浜小路** 今でも、クリスマスカードとかメールとかでこんなに大きくなりましたとか、連絡が来ますよ。お産に対する考え方もいろいろですよ。それぞれ全然違うから面白い。だから、子どもが産まれる時は色々違った対応が必要になるの。お産の立ち会いは、その都度病院も違うし、できることとできないことがあるからね。

**小澤** でも、そばにいてくれたら安心ですよ。それだけ経験を積んでらっしゃるのだから。

**浜小路** 少しくらいは分かるからね。妊婦さんに「これはこう」って説明できるとか。

**西川** もう何人立ち会った？

**浜小路** 正確にはわからないけれど、100件くらい。たまに、辛いて思うときもあるけど。でも、やっぱり、いい仕事ですよ。人を助けるってことだから。

## この仕事はやめられない

**西川** 「いつもありがとう」って言ってもらえる仕事って、すごいですよね。

**浜小路** 満足感がありますね。

**小澤** それがやる気につながるんですね。

**浜小路** そうそう。

**西川** この仕事のやめられないところだなと思います。

**浜小路** 緊急電話もね、困ってるから電話してくるわけでしょう。

**小澤** あなたがいて良かったっていうことですよ。

**浜小路** そう。例えば怪我をした人から緊急電話に連絡があったとしても、その人がどんな状態がよく分からないと、救急車呼ぶか自分でタクシーで病院の救急に行くかの判断は難しいですよ。だったらその人のところに駆け付けて行ってその人が「助かった〜」って思ってくれたらそれはとっても嬉しいです。

**小澤** 1年に何名か、病院に緊急で行く人がいますから、本当に助かっています。

**浜小路** 緊急の度合いはいろいろだけど、本人は誰か来てもらった方が良いみたい。

**小澤** 安心ですよ。

**浜小路** でも、行けない時もあります。例えばこの前の雪の時に誰かが滑って転んだとして、行けたかどうか分からない。

**小澤** そうですね、車が通れない道がありました。

**浜小路** その時はその時で仕方ないですが、行ける時は行った方が良いと思うんです。ただ、東京となると夜中だと…ちょっと行けない。

**西川** 遠いしね。

**浜小路** 震災の時は本当に自分が何もで

きないって分かった。どこも電話が繋がらないし、どうにもならないというか、自分の家族が活着ているのかどうかさえ分からない状況でした。だからせめて自分の周りにいる人だけと、私は丁度つくばの1ヶ月検診の人と一緒にいたから、その人だけをとにかく保護してJISTECに戻って、一緒にその人の子どもを学校へ迎えに行って…それくらいしかできなかった。

**西川** 私もIPMUにいて何もできなかったですね。電車の情報を集めるというのにしても、難しかった。

**小澤** 自宅に帰るのも大変でしたもの。アンナさんのお家も大変でしたね。色々壊れたりして…

**浜小路** 大変でした〜。(笑)

**西川** そういう時、本当に無力ですね。サポートセンターと言いながら、本当に何もできないんだなっていう気がしました。

**浜小路** でも、できることには限りがあるから、できる時はやるし、できない時は仕方がない。例えば誰かが足を骨折して夜中の3時に秋葉原から電話がきたとしても、足の骨折だったら先ず病院に連絡して、朝まで待ってから病院にタクシーで行ってもらうかもしれない。でも、誰かが夜中に昏睡状態で運ばれたとしたら、とにかく車で行くか、旦那を起こして送ってもらうみたいな感じかな、そういう差はあるよね。

**小澤** 家族でもないのに、そこまで考えてくれる人がいるというのは、IPMUの外国人研究者は幸せだと思います。こういうサポート体制がもっと他に広まるいいなと思います。

**西川** IPMUが外国人サポートの良いモデルになって欲しいですね。

**小澤** そうですね。この体制が先ず最初に柏キャンパスの中に広がって、それが東大全体に広がって、今度は他の大学に広がって、更に日本全体に広がると良いですね。

**浜小路、西川** 本当にそうですね。

**小澤** 今日は楽しいお話をありがとうございました。

**浜小路、西川** こちらこそ、ありがとうございました！